研究ノート

日本語パブリックスピーキング能力養成のニーズを探るための基礎調査

深澤のぞみ[1]・ヒルマン小林恭子[2]

要　旨

日本の労働市場が技術的にも専門的にも高度なグローバル化の方向に進んでいる中，日本語非母語話者の公的な場での口頭コミュニケーション，つまりパブリックスピーキングの能力が不可欠となってきている。このような社会的背景の中，日本語教育では学習者が教室を後にし実社会に出た際，どのような日本語を必要としているのか，特にパブリックスピーキングにおいてのニーズはどう変わってきているかについて，あまり検討を重ねていない。そこで，本稿ではパブリックスピーキングを含めた日本語の教育を行っている人々や企業や公的機関などでの職務上日本語を使用したことがある人々へインタビュー調査を行い，パブリックスピーキング能力養成のニーズを探るための基礎的な分析を行った。その結果，パブリックスピーキングに関しては，日本語教育を行う教師と，公的な場で日本語を使用している非日本語母語話者と，重視する事柄がやや異なることが観察された。教師側の関心は，話す技能だけではなく，他の技能とのバランスも考慮した広いものであり，スピーチ活動も学習者のモティベーション強化として採り入れられているということがわかった。一方，非日本語母語話者は改まった場で敬語使用が必須のあいさつスピーチに直面し，日本人の同僚の協力を得ながら模索していることがわかった。これらのことから，今後は，職務上日本語を使用している非日本語母語話者のニーズをさらに深く分析する必要性があること，また，日本語教育で広く扱われているスピーチコンテストのためのスピーチについてもそのニーズや内容を調査する必要性があることが課題として浮かび上がった。

1　金沢大学人間社会学域国際学類
2　元金沢大学留学生センター

キーワード：日本語パブリックスピーキング，ニーズ，スピーチ

Ⅰ．問題の所在

日本の少子高齢化による労働力不足や，経済のグローバル化などにより，日本と諸外国間で，人々の移動が頻繁に行われるようになった。2011年には，日本での東日本大震災，ユーロ経済危機，そしてタイの大洪水と，大きい災害や経済問題が次々起こったが，その際，発生地域のみならず世界へと影響が波及することが観察された。東日本大震災では，日本に居住していた外国人が帰国し，これまでずっと過去最高を更新していた外国人数が減少した。少しずつまた日本に外国人が戻りつつあるが，震災以前の人数には戻っていない[1]。一方タイの大洪水で操業ができなくなった日本企業の工場では，タイの工場で働いていた現地の労働者が，一時的に日本の工場で就労したり，技術者の研修を受け入れるという動きが出てきている[2]。

総務省が2006年に「多文化共生推進プログラム」の提言を発表して以来，日本の多文化共生社会の実現の必要性が頻繁に言われるようになってきたが，実際には，上述したように，次々と新しい局面が現れるというのが現実である。このような中，日本企業は，グローバル化戦略を進めて行かざるを得ない状況にあり，高度人材としてのビジネスパーソンや，外国の現場と日本の現場との橋渡しをする「ブリッジ人材」にも，種々の高い日本語の口頭コミュニケーション力がますます求められる。このような社会性および専門性の高い言語活動を行うためには，一般的な「会話」だけでなく，公的な性質を持つ口頭コミュニケーションである「パブリックスピーキング」(Public Speaking)[3] の能力が不可欠であると思われる。

1）平成22年末の外国人数は213万4,151人で，全人口の約1.67%である。さらに，通常は年に1回の調査がされるのみであるが，東日本大震災（平成23（2011）年3月11日）の影響をはかるため，法務省は平成23年3月末と6月末にも調査を実施した。23年3月末には，209万2,944人で4万1,207人（1.9%）の減少，6月末は，209万3,938人で3月末と同水準で留まっている。入国管理局ウェブサイト＞統計＞外国人登録者（http://www.immi-moj.go.jp/toukei/index.html）

2）経済産業省HPに，タイの日系企業に勤務するタイ人従業員の就労許可や日本における研修受入れについての解説が掲載されている。経済産業省ホームページ＞注目情報＞タイの洪水被害への対応について（http://www.meti.go.jp/topic/data/111028aj.html#s03）

3）本稿では，「パブリックスピーキング」を，「ある程度改まった場所で，一人の話し手が対象となる複数の聴衆に，自分の責任において自分の考えを論理的にまとめて伝えようとすること」（ヒルマン小林・深澤（2009））という定義を採用することにする。具体的には，意見表明やあいさつのスピーチ，プレゼンテーション（研究発表も含む）の他に，面接での自己紹介や会議での発言なども含まれると考える。

従来から，日本語教育では口頭コミュニケーション力養成が重視され，教授法や教材なども数多く開発されてきているが，その内容については，意外に吟味されてきていないのではないかと感じられる。平田（2010）は，話し言葉の教育に先立ち，話し言葉自体のカテゴリーを分類すること，そして学習者のニーズに沿ったものか検証することが必要だと提唱しているが，現実の教育では，話し言葉にどのようなジャンルの口頭コミュニケーションが含まれ，実社会での応用性がどの程度あるのか，検討されて来ていない。

筆者らは，グローバル化が進む中での日本語教育を考える際に，通常の「会話」だけではなく，公的な機能を持つ口頭コミュニケーションの教育が必ず必要なのではないかと考え，そのための基礎調査を進めながら，「日本語パブリックスピーキング」の教授法の構築を試みている。

本稿では，日本語教育に携わりパブリックスピーキングに関する指導を行っている人々や，実際にグローバル企業や機関等で日本語を使用している人々へインタビュー調査を行い，日本語パブリックスピーキングに関するニーズにどのようなものがあるのか，まず実態を明らかにし，ニーズ抽出のための基礎的な分析を行った。この結果を，いくつかの観点から紹介し，考察を加える。

II．先行研究

日本においてパブリックスピーキングを扱った文献は決して少なくないが，ほとんどが効果的なスピーチの方法といったいわゆるノウハウ本が多い。また，先行研究としては英語教育におけるものが多く，英語のパブリックスピーキングに関する理念や具体的な指導法を論ずる内容が広く見られる。一方，日本語教育に関しては，パブリックスピーキングというタイトルで論じたものは，それほど多くなく，ヒルマン小林・深澤（2010）と深澤・ヒルマン小林（2011a,b）の他にはあまり見られない。

しかしだからと言って，パブリックスピーキングの実践が行われてきていないということではない。深澤・ヒルマン小林（2011a）が行った日本語教材の調査で明らかにされているが，日本語教育の中では，「スピーチ」「プレゼンテーション」「口頭発表」などの用語が厳密な定義なしに使用されており，パブリックスピーキングということを特に意識せずに，現場での実践が種々行われているという現実がある。

スピーチについて論じた研究は，日本語教育にもいくつかある。その代表的なものは，土岐（2001）であろう。日本語のスピーチという用語が「独話」に近い使い方をされているが，その中に含まれるのは，簡単なあいさつあるいはメッセージといった

特徴を持つ「テーブルスピーチ」から，意見発表の性質を持つ「スピーチコンテストのスピーチ」や「施政方針演説」まで，様々なものが含まれていることを指摘している。さらにスピーチ教育の面で，聞き手をあまり意識してこなかったことについても言及している。

スピーチ指導についての報告や研究は，これまでもよく行われてきている。ビジネスパーソンや外交官などに対する日本語教育において，職務上のニーズとしてスピーチによる日本語発信練習が必要であると述べたもの（清1990，和泉元他2005など）に加え，聞き手に対する配慮の実現型である「注釈挿入」を発表指導に取り入れた報告（平田・船橋2011），聞き手の立場を意識することで自分自身のスピーチ作成過程に変化が見られたという報告（林2010）などがある。また，スピーチコンテストに向けたスピーチ指導に関して，ピア活動を取り入れた実践などが報告されている（藤田・フランプ2009）。

以上見てきたように，パブリックスピーキングの教育そのものは，日本語教育の中で実践がなされているが，ニーズについての詳しい調査および検証や，パブリックスピーキングに含まれるジャンルに関する検討がされないまま進められていることは否めない。そこで，本研究では，今の時代に適合したパブリックスピーキングに関するニーズはどのようなものなのかを，まず実態を明らかにし，そこでの課題を丁寧に掘り起こし，考察することから試みることにした。

Ⅲ．研究方法

1．研究の資料

日本語教育に携わりパブリックスピーキングに関する指導を行っている人々（以下，日本語教師と呼ぶ）や，実際にグローバル企業や機関等で日本語を使用している人々（以下，非母語日本語使用者と呼ぶ）へインタビュー調査を行い，「日本語パブリックスピーキング」に関するニーズの分析を行った。

調査は，2011年に対面あるいはスカイプを利用して，半構造化インタビューの形で行った。インタビュー項目は，日本語教師に対しては，現在指導している日本語教育機関についての概要を聞き，担当している日本語パブリックスピーキングに関連する科目についての詳細と，成果や課題を話してもらった。また非母語日本語使用者に対しては，現在の仕事の内容と日本語パブリックスピーキングに関連する業務についての詳細と問題点，これらを遂行するにあたって努力していること，日本語教育の枠組みの中であったほうがよかったと思われる指導内容についてなどを話してもらった。

このインタビューにおいては，研究の目的を説明した上で，結果を研究以外に使用しないことを確認した。また，成果を発表する際にも，個人や関係の機関などが特定されないよう十分配慮することとした。使用言語は，基本的には日本語で行ったが，インタビュー対象者によっては，英語でも行った。今回分析を行ったインタビューは，日本語教師が4人，非母語日本語使用者が3人で，その概要を表1に示す。

表1　インタビュー調査資料の概要

No.	タイプ	職務内容	インタビュー時間
1	母語話者日本語教師	海外の大学講師	27分
2	母語話者日本語教師	海外の日本語学校教師	10分
3	非母語話者日本語教師	海外の大学講師	32分
4	非母語話者日本語教師	海外の大学講師	56分
5	非母語話者日本語使用者	海外の日本企業社員	27分
6	非母語話者日本語使用者	公的機関の職員	23分
7	非母語話者日本語使用者	JET プログラムの ALT 経験者[4]	45分

2．研究の手法

1．で行ったインタビュー調査の後，IC レコーダーで録音したものを書き起こし，ひとまとまりの発話を単位として，これにいくつかのキーワードを設定してタグ付けしていった。この結果を，いくつかの観点にカテゴリー分けし，考察を加えた。

Ⅳ．結果と考察

インタビュー結果を，教育機関で日本語を指導している日本語教師の立場からと，非母語日本語使用者の立場からと，2つの視点からまとめ，考察した。以下に報告する。

1．日本語教師の立場から見た日本語パブリックスピーキング指導

今回の調査でインタビューしたのは，いずれも海外の日本語教育機関で日本語指導

4）JET プログラムというのは，「語学指導等を行う外国青年招致事業」(The Japan Exchange and Teaching Programme) の略称で，主に英語母語話者の大学卒業者を日本に招聘するプログラムのことである。職種としては，外国語指導助手 (ALT)，国際交流員 (CIR)，スポーツ国際交流員 (SEA) の3つがあり，小中高の学校や地方公共団体の国際交流担当部局に配置される。地方公共団体が総務省，外務省，文部科学省及び財団法人自治体国際化協会 (CLAIR) と連携して実施している。

にあたっている日本語教師であった。日本語母語話者教師と非母語話者教師に分かれ，日本語の指導をしている日本語教育機関は，大学と日本語学校である。主に，「会話」の授業を担当している教師にインタビューを行った。

1.1　「会話」の授業の内容や指導法

「会話」の授業の扱いについては，当然だが，所属する日本語教育機関の方針や学生や教師の数，シラバスに大きく影響される。いわゆる「総合日本語」の授業の中に「会話」も含まれ，独立して「会話」の指導をしていないと回答した教師もいた。逆に，ビジネス系の学科で教える日本語教師は，低学年のうちは，教科書の中の「会話」を利用して，文法や文型の運用をはかるようにし，その後は，ビジネスの場面を強く意識した会話を指導すると回答している。

> 回答例1：ビジネス実技に関する科目が3，4年にある。教科書もある。指導するのは元ビジネスマンの日本人教師で，名刺の渡し方から，アポイントの取り方，飲み会への誘い方，宴会でのあいさつ，会議での発言の仕方など，詳しくビジネス現場で必要となる会話を指導している。（インタビュー番号1）[5]

別の回答者も，学年が低いうちは文型定着のロールプレイなどを行い，その後，学年が進むと，「喫茶店で友人と一つの課題について意見交換をする」という簡単なディベートから，アンケート調査の発表などをさせることもあると述べている。

> 回答例2：初級会話は1年生で，文型の定着や短文を扱う。中級会話は2年生でロールプレイが中心。ペアを作って，自分の町についての説明や，依頼の練習もさせる。上級会話は3年生で，ロールカードを使う。演技やドラマをさせる。（インタビュー番号4）

> 回答例3：「実用会話」という授業では，ディベートをさせる。最初の段階

5）回答例として挙げたものは，原則として，インタビュー調査で話されたことの内容であるが，紙幅の関係で，実際のインタビューに含まれる繰り返しや言いよどみなどを削除し，簡潔に書き直しを行った。英語で回答されたものについては，訳した内容を記載している。また，個人や個別の機関名などが特定される内容の場合も，適宜，書き直しを行っている。

のディベートでは，競技ディベートではなく，賛成と反対の意見を述べる練習を，たとえば「～じゃないですか」とか「～ではないでしょうか」の表現を使いながら練習させている。(インタビュー番号４)

作文の授業との関係について述べた回答者がいる。パブリックスピーキングは，口頭での表現でありながら，書き言葉がベースになっていることが特徴として挙げられるが，そのことと関係があると思われる。

回答例４：会話の授業は独立して存在していない。コースは教科書ベースだが，中級半ばになると教師の裁量で自由にできることが増えるので，「会話」や「スピーチ」を授業に取り入れた。具体的には，作文の授業の一環として，まず作文を書かせて，それを発表させるというようなことをしている。(インタビュー番号２)

回答例５：「実用会話」の中で，プロジェクトワークを行っている。大学の中で実態調査のようなことを行って，それについてパワーポイントで発表させている。アンケートの仕方などの授業も少し行った上で，調査をさせている。(インタビュー番号４)

回答例５では，プロジェクトワークとして規模の小さい実態調査をさせ，それについてパワーポイントを使って発表させることが述べられている。この際には，アンケートの仕方などの授業もあわせて行うとのことで，この授業の目的は，最後の発表にだけあるのではなく，学術的な基礎技能としての調査方法や調査のプロセス全体の指導に置かれているように思われる。

以上のように，コースにおける「会話」の授業内容は，それぞれの機関の目的に応じて，かなりの違いがあることがわかる。また，今回の調査では，海外の日本語教育機関で指導にあたっている日本語教師にインタビューしたが，その教育機関が学習者にとって母語環境にあるのか，第二言語環境にあるのかでも，大きい違いが出てくるものと思われる。

１.２　日本語パブリックスピーキングに対する意識

1.1で見たように，会話の授業の捉え方や実施方法は，機関によって大きく違いがあり，当然，日本語でのパブリックスピーキングの扱い方も異なる。

ビジネス実技を重視している機関では，ビジネスプレゼンテーションの指導を行っていると回答している。

回答例6：ビジネスプレゼンテーションは，非母語話者教師が教える科目の中に含まれる。学習者には，自社の製品の説明を1年次からプレゼンさせている。低学年の場合は，製品の説明をするだけの日本語力が付いていないので，製品の説明にあたる部分を学習者の母語でさせ，その時点でできる部分のみを日本語で行わせている。（インタビュー番号1）

回答例6は興味深い内容で，製品の説明部分そのものは学習者の母語でさせ，その時点での日本語力でできることだけを日本語で話させるという。つまりこれは，骨組みの部分だけを日本語で話させていることになり，日本語パブリックスピーキングの一つのジャンルとしてのビジネスプレゼンテーションの構造や特徴が意識され，利用されていることになる。

一方で，教科書に沿った総合日本語の授業を進めるだけで手一杯だと答えた教育機関では，日本への留学に送り出す予備教育的な指導をしており，むしろ，日本語の基礎力をつけることが重要であり，プレゼンテーション能力などは，留学後の教育で伸ばしてほしいと考えられていることがわかった。

また，会話の授業の中で4年生に対しては，様々な種類のパブリックスピーキングに該当するような練習をさせるという回答があった。

回答例7：「実用会話」の4年生に，スピーチ，就職のインタビュー，自己紹介などを課す。クラスの人数が多いので，あまりゆっくりはできない。（中略）4年生の最後の期末テストとして発表会を実施している。教師はあまり添削などをしない。また，学生の評価力も見る。（インタビュー番号4）

回答例7では，就職のいわゆる面接のことにも触れられている。このインタビューを行った機関では，日本語教師だけでなく，日本の会社や大使館などで，通訳や旅行業務などの仕事に就く学生が多いという。

回答例8：会社のインタビューの際，自分自身がないとうまくいかない。たとえば，会社を選んだ理由や自己紹介など，結局何が言いたいのかわからない話をする学生がいる。会社で通訳する際にも，目的のない話で時間がなく

なるようなことは避けなければならない。(中略) 現在，授業で学生にMC(司会者) をさせることがあるが，時間管理をしっかり指導している。司会者の役割でも時間管理は重要だが，会社のインタビューでも，一つの話を長くしすぎたら，肝心の話ができなくなるかもしれない。質問者からすれば，質問したことにだけ答えてほしいと思うだろう。(インタビュー番号4)

回答例8では，目的のある話をすべきとか，目的を意識した時間管理が必要だという指摘をしている。この回答者の視点は，聞き手にとってのわかりやすさや効率といったことにも及んでいる。これは，パブリックスピーキングを検討するにあたって，重要な観点であるが，今の日本語教育の中では，それほど意識化されることのない項目ではないかと思われる。

1.3　スピーチコンテスト

海外での日本語教育と日本国内での日本語教育には，目的や方法にかなりの違いがあるが，その一つはスピーチコンテストの役割ではないだろうか。海外での日本語教育機関を視察すると，必ずと言っていいほど，スピーチコンテストについて報告がなされる。一方，日本国内では，スピーチ大会はもちろんよく開催されているが，学習者にとっては第二言語環境であり優先順位が低くなることがあるせいか，それほど重要なこととして扱われることはないのではないかと思われる。本調査でのインタビューでも，スピーチコンテストについて語られているので，紹介する。

回答例9：初めてスピーチコンテストに取り組んだ際には，いい成績を出せば日本に行けるという期待があった。スピーチコンテストには2つのタイプがあり，(副賞として) 日本に行けないAグループと，日本に行けるBグループである。自分は，1年生のときにAグループに参加し，4年生のときにBグループに参加した。(インタビュー番号3)

回答例10：国内の各支部でスピーチコンテストが行われるが，一番大きいのは，春に毎年首都で行われるスピーチコンテストである。これには，学生が自分でCDを送り，審査を通れば，本選に出ることになる。授業の中では特に指導はしていないが，教員が一対一になって，何が言いたいのかを引っ張り出して作らせる。なかなか簡単にはうまくいかないので，時間をかけて指導している。(インタビュー番号2)

回答例11：現在の大きい問題点は，日本語を話す機会が少ないこと。話す機会が少ないと，卒業後に日本企業に勤めたくても自信がないために，あきらめた友人もいる。（インタビュー番号３）

回答例９は，回答者自身が日本語学習者であった際にスピーチコンテストに参加し，実際にいい成績をおさめたことを紹介している。スピーチコンテストは，機関内のコンテストへの参加から始まり，各支部，そして，全国レベルで勝ち上がっていくシステムになっていることが多い。最終的に，全国レベルでのコンテストで入賞した場合，日本の国際交流基金が開催するスピーチコンテスト本選への出場資格や往復航空券が与えられることがあり，スピーチコンテストでの成績は，渡航のチャンスにもつながることとして重視されていることがわかる。また，回答例11で話されているように，海外の環境では，授業以外には日本語を話す機会はそれほど多く得られないことが普通だが，日本語を話す機会として積極的に捉えられている現状も明らかになった。次に，スピーチの内容について述べられていることを紹介する。

回答例12：スピーチでは，「普通」の内容ではうまくいかない。自分の経験の中からおもしろいものを取り上げて発表した。たとえば，「地球温暖化」などの大きいテーマはおもしろくない。インターネットで調べたらすぐにわかる。そういうものはつまらない。（中略）しかし，特異な経験をすることが重要なのではなく，小さい経験，自分の経験をもとに，言いたいことを伝えられなければ，スピーチとしてはよくないものとなってしまう。（インタビュー番号３）

回答例13：まず，考えたことを的確に書くという作業が必要になる。内容，そして，伝え方や話し方，最後にどういう風に皆の前で話すかということが重要だ。総合力ということになる。（インタビュー番号３）

回答例14：スピーチも，まず，自分の考えを書けなければならないので，一番高い能力が必要だ。それから，スピーチコンテストで優勝している先生たちの経験を学生に伝えるのもいいと思う。１ヶ月ぐらい暗記するとか，どんな苦労をしたかの紹介もあるといい。（インタビュー番号４）

回答例12では，内容の重要性が指摘されている。「地球温暖化」ではだめだと述べて

いる。スピーチの内容については，アカデミックプレゼンテーションやビジネスプレゼンテーションと比較して，一番異なる面なのではないか。自分の経験から，それも特別な経験でなくても，小さい経験から，自分の言いたいことを引き出して話すこと，それが重要だとしている。さらには，考えたことを書き表し，それをもとに，わかりやすく伝えることが必要で，総合力の必要性も指摘されている。

これらのことをまとめると，海外におけるスピーチコンテストは，具体的な日本渡航の機会につなげられることから，学習者のモティベーション強化に役立つと思われていること，そして，自分の考えをまとめ，書き表し，さらには効果的に発表するという，総合力が必要であることから，学習したことの総まとめ的な機能を持つこともわかる。日本国内よりも海外で重視されているのは，日本語を実際に話す場としても大きい役割を果たしているためであろう。

2．非母語日本語使用者の立場から見た日本語パブリックスピーキング指導

今回の調査では，表１の通りその対象者は，海外の日本企業に現在勤務中の非母語日本語使用者と，以前日本に住んでいた時に仕事で日本語を使用する機会があったという使用者である。

2.1　公的な場面での日本語使用の難しさや問題について

日本語を職場で話すことについては，それぞれの対象者は話す能力が特別に他の能力に劣っているという意識はなく，むしろ得意な方であると回答している。その一方で，実際にあいさつスピーチのような公的な場面で話すことについては，それが難しいと感じたと答えた。日本企業に勤務している回答者は，社長のスピーチを通訳しようとした時に困難を感じたと答えている。その要因として，改まった場面の雰囲気なので，緊張度が高いということと，敬語が主な要因だと明らかになった。

自己紹介のようなあいさつスピーチをする場合は，初対面の大勢の人の前で話すことが多いがそのような場面ではかなり雰囲気が改まっているという印象があり，そのような雰囲気に慣れていないということが更に緊張度を高めたと言えるようだ。母語であっても同様のスピーチを行うのは，頭の中で考えながら口に出すので難しいと指摘した回答者もいた。JET プログラムの経験者は次のような回答をしている。

回答例15：自分は県庁の ALT だったので，１年に何回かパーティーがあり，その時も日本語でスピーチを行った。それはほとんどの県庁職員は英語ができなかったからだ。県庁のパーティーはいつもいいホテルで行い，出席者は

着飾っていて改まった催しだった。ALTは大学を卒業したばかりでそのような改まった席に出席したことがなかったので，ステージに上がってスピーチをするのは緊張して大変だった。（インタビュー番号７）

またこの回答者によると，自己紹介のあいさつスピーチの頻度は大変高かったという。新しい学校へ行く場合，またはたまに教える学校へ行く場合は，毎回職員の前で日本語で自己紹介を行ったとのことだった。各教室の生徒の前では英語ですることも多かったが，職員を前にする場合は，多くの職員が英語がわからないため，日本語で行うようにしたと説明した。

日本企業に勤務している回答者も，スピーチやビジネスプレゼンテーションの通訳をすることが多いと回答した。

敬語に関しては，敬語自体が普段の会話の中で出てくる言葉とは異なる言葉が多く、それを口からスムーズに出すには練習が必要であると感じたと回答者らは話している。その上に１対１で敬語を使用するのと，大勢の前で行うあいさつの中に入れる敬語は異なるという指摘もしている。１人の対象者は次のように回答している。

回答例16：敬語の知識があったが，シチュエーションに合わせた自然な敬語の使い方や正しい使い方が最初にあまりわからなかったので，それが少し難しいと感じた。（インタビュー番号６）

回答例16では，この回答者は敬語を使わなければならないシチュエーションにバラエティがあり，その微妙な違いに合わせた敬語の使い方がわからないと感じたようだ。そのため日本語の教室で習った敬語の知識だけでは，実社会ではまだまだ使うことができないというのが，率直な印象のようだった。

通訳をする場合に困難を感じることの中に，敬語が入った定型のあいさつ表現があるとわかった。特にあいさつの最初と最後の部分の表現は，最初はわからなくて通訳するのが難しかったという回答を得た。

さらに，内容に関して難しかったという回答にはどのような内容でスピーチをすべきかについてわかりにくいというものがあった。忘年会や新年会であれば，その年や新年のことについて言及すればよいとわかったが，その他の会の時にはどんな内容にするのが社会的に最も適切と考えられているのかを判断するのに困ったということだった。その具体的な回答の一部は以下の通りである。

回答例17：難しかったことは，日本のスピーチはある程度正しい言い方というのが決まっているが，ALTのスピーチには，独創的な内容や日本的ではない内容を，聞いているみんなが期待しているように感じたので，日本の普通のスピーチと異なった外国人の視点などの入った内容でも，どんな内容でも受け入れてもらえるように感じた。(インタビュー番号7)

しかし，外国人だから何でもいいと思われても，その方が却ってシチュエーションによってどんなトピックを選ぶべきかということもわからなくて困ったと同じ回答者は述べた。このことについて以下のように述べている。

回答例18：同僚の日本人に聞いていた。でもその人たちはよく「そんなに気にしなくっても日本語でスピーチをするだけでみんな驚くから何を話しても同じ」と言った。その人たちは自分のスピーチが日本式でなくても，日本語で話していればいいと思っていたと思う。それで自分の話し方が正しいかどうかはよくわからず，いつも日本語で話すというそれだけだった。今もどうやって日本語の正しいスピーチをすべきかよくわからない。例えば歓迎会や送別会で，その人の話について話すべきなのかなどよくわからない。(インタビュー番号7)

回答例18では，既に多くの場で日本語のスピーチを行ってきた回答者が，今もそのやり方が適切だったかどうかという点において，自信が持てず，葛藤を感じていることが明らかになっている。

通訳において，内容に関連して難しいことは，文化的な違いをどのように理解しながら通訳するかということだとわかった。特に交渉に関係することは一番難しいとして，以下のような回答が得られた。

回答例19：給料や労働条件のことなどは，ローカルスタッフの考え方，マネージャーの考え方，日本人の考え方など，それぞれ違うので，そのまま通訳しないほうがいい。激しい言葉を激しい言葉で通訳しないようにして，自分の言葉で伝えるようにする。たとえば「会社はお金がない」というような言い方をせず，「会社は今年はその能力がありません」というような言い方にしたりする。はっきりそのまま言えばいいというものではない。判断を加えながら通訳するのが難しい。(インタビュー番号5)

しかし，ビジネスプレゼンテーションやルーティーンのミーティングの通訳の際は，専門用語だけが問題になることはあるが，概ね内容がわかるので特に大きい問題はないと答えている。

また，スピーチの構成に関して日本語と英語を比べると，自分が聞いたスピーチは100年前の英語のスピーチとレトリックが似ていると思ったと１人の回答者は答えている。また日本のスピーチは，真面目で感情が露わだと思ったとも述べた。この回答者がこのように答えた理由として，日本語のスピーチの中には叱咤激励などを含むアドバイスが入り，長さが長いことを挙げた。

2.2　直面した問題や困難の解決法について

次に2.1で明らかになった問題や難しさに直面した時にどのように克服・解決したかについて質問した。

まず緊張に対しては，前もって準備をし，何度も練習したという回答が得られた。準備の時に日本人の同僚などに原稿を書いてもらったり，自分の書いた原稿を相談したりしたと回答している。敬語に関しても日本人の同僚との相談によって，適切だと思われる表現を選んだという回答を得た。

また内容に関しては，同様に同僚の日本人に相談したり，他の人のスピーチを聞いて考えたりしたとわかった。日本のスピーチは季節のあいさつから始まることが多いと感じ，天気などから始めるなどの工夫を行ったという回答者もいた。しかし，上述の通り日本人と全く同じ内容にする必要性がないと感じ，逆にどの程度の自由な内容にするべきかで不明点が残るとも考えていることがわかった。また，別の回答者は，日本語で話すなら，日本人と同じように話し，日本人と同じルールを使った方がいいと思うと答えている。このように問題や難しさに直面した時には，その度毎に日本人の同僚に相談し，最終的には自分自身の考えに基づいてスピーチを行ったと見られる。

2.3　自分の経験から考えられる実践的な教室活動について

最後に自分の経験に基づいて，どのような話す活動が日本語学習者の助けになると思うかを質問した。

敬語の使い方に困難を感じた回答者は，仕事の場合の公的なスピーチに使う敬語も，文化説明でウチ・ソトについて触れるように，言葉遣い・敬語の使い方の説明として行われた方がよいと提案している。また，教室でのよりよい練習について次のように提案した。

回答例20：仕事で日本語を使って公的に話す機会があるなら，敬語の言葉だけでなく，どんなふうに使った方がいいかを練習する。1対1だけではなく，グループの前で練習する必要もある。自分の時は丁寧語を使ってしかグループの前で話す練習をしていなかった。敬語を使ってグループの前で話す練習をすれば役に立つ。(インタビュー番号6)

回答例20では，敬語の練習も実際のあいさつスピーチに近づけて，複数の聴衆の前で敬語を使う練習をさせるという実践的な活動を提案している。これは，精神的に緊張している中で敬語を話す練習にもなるのではないかと考えられる。

どのような内容にするかについて困難を感じた回答者は，教室でのよりよい練習について次のように提案した。

回答例21：スピーチの構成を教えるのはいいと思う。スピーチの始めと終わりの部分。よくわからないが，ある程度決まった流れの型があるので，それを勉強するのは役に立つと思う。また場面別のスピーチの練習もよいと思う。どんな主題で話をするかなど。それは自分がスピーチをする時にいつも気になっていたことが，どんなトピックで話を進めるかということだったから。(インタビュー番号7)

回答例22：だから，スピーチの構成と催し別にどんなスピーチが適切なのかを教えるとよいと思う。(インタビュー番号7)

この点については，他の回答者の答えも似た指摘をして，次のように答えた。

回答例23：公的なスピーチの場合は最初と最後以外の部分に自分の考えていることを入れて，サンドイッチの中身は自分で選ぶが，上と下のパンは決まっているので，それをどのように作ればいいかを教室で教えてくれればいいと思う。(インタビュー番号6)

回答例24：公的なスピーチにはセットフレーズが多い。最初と最後の言葉は敬語だがいつも決まっている。シチュエーションによって，社会的なルールがある。1対1の場合は教室で教えられた通りにすれば使えるが，公的なスピーチの場合は社会的なルールがある。何度も聞けば自然に学べる人もいる

が，学べない人もいると思う。（インタビュー番号６）

上述の回答から，スピーチの中で既に社会的に汎用されている構成と決まり文句は，場面とともに教室で教えられるという可能性が指摘されていると言えよう。日本人でもスピーチのやり方について学校教育の中で特に学習したことがないという人が多く，スピーチを依頼されるようになってから，スピーチに関する参考書にあたり，本番を迎えることが多いと思われるが，日本社会で日本語を使用する外国人の場合も公的な場でスピーチをする可能性が十分にあると考えられるので，その基礎についても教室内で学ぶことができるのではないか。

大学の日本語教育でもこのようなスピーチについて学んだ方がよいと思うかについて尋ねたところ，上級レベルであれば，将来日本で仕事をする計画のない学生でも，学んでおいた方がよいと思うという回答を得た。それは，卒業後，何らかの形で日本に行った時には，宴会や結婚式などいろいろな場合に日本的なあいさつをする機会が十分出てくると考えられるから，必ず役に立つと説明している。

また，スピーチコンテストへの参加が実社会で行うスピーチに役に立つと思うかという問いに対しては以下のような回答を得た。

回答例25：スピーチコンテストは「ごあいさつ」とは異なる。スピーチコンテストでは内容を説明することが大切なので敬語を使う必要は感じない。それより乾杯の音頭や結婚式のスピーチや入会のスピーチなど，日本でよくするスピーチを練習した方がよい。（インタビュー番号６）

また，この回答者はスピーチコンテストの内容が自分の興味についてであったり，大学が選んだテーマであったりして，敬語を使用すると逆に不自然になることを指摘している。実際の日本でのあいさつスピーチなどでは敬語の使用が当然であり，さらにそのことがスピーチの難度を上げているということから，スピーチコンテストのスピーチとの違いは大きいと捉えていることがわかる。

Ⅴ．終わりに

本稿では，日本語を教える日本語教師と，実際に日本語を使っての日本語パブリックスピーキングを経験している非母語日本語使用者とのインタビュー結果についての報告を行った。どちらも，今回扱ったインタビューの数は限られているため，全体像

を網羅しているわけではないだろうが，実態の一端が明らかになり，より詳細なニーズ分析を実施するための基礎固めができたと考える。

今回の調査で浮かび上がったことの１つとして，日本語教師が指導項目として実施していることや重視しているとした項目と，日本語パブリックスピーキングを経験している人が取り上げた項目には，互いに少しズレがあるように見えたことがある。

たとえば，日本語教師が活動を行う日本語教育の場では，何に焦点をあてるかはその教育機関や指導者によって異なり，どちらかと言えばその関心はもっと広い技能に向けられ，授業で扱われている。スピーチという活動を授業に取り入れる目的は，学習者が実社会で役立てられる技能を習得させたいというより，書く技能から話す技能への展開であったり，日本語学習のモティベーション強化であったりすることがわかった。一方，非母語日本語使用者側は，実社会の中で日本語話者として日本人と共に仕事を遂行している場面にあり，より具体的なニーズの可能性が浮かび上がってきた。それは，まず非母語日本語使用者は，自らがスピーチを行う場合と他人が行ったスピーチや講演などの通訳や翻訳をする場合があるということである。スピーチと言っても，改まったパーティーにおけるものもあれば，朝礼や職場内の宴会という場合もあるだろうし，通訳の場合には，企業や自治体の長の立場の人の通訳をする場合もある。ここで非母語使用者が指摘していたのは，使用する必要のある敬語やスピーチの型，そしてその話す内容の適切さをどのように考えればいいのかということである。今回調査をした非母語日本語使用者は，実社会に出る前は日本語の教室内で技能を積み重ねて行った結果として，現在の職業に就くことができたわけだが，今回の両者のインタビュー結果から，日本語教育の現場で行った活動が，実際の日本語パブリックスピーキングにどうつながっていくのか，深く意識することがさらに重要なのではないかと思われた。

今後の課題として，２つの方向を考えている。１つは，日本語使用者のパブリックスピーキングに関するニーズに関して，データをさらに広く収集し，深く検討したいということ，そしてもう１つは，スピーチコンテストにおけるスピーチは，独立したジャンルとしてその意義や内容，具体的な指導法について考察する必要があるのではないかということである。引き続き，検討を続けていきたいと考えている。

【付記】

本研究を進めるにあたり，一部に平成22年度科学研究費補助金（基盤研究C）「日本語パブリックスピーキングの教授法確立を目指した総合的研究」（課題番号：22520525　研究代表者：深澤のぞみ，研究分担者：三浦香苗，研究協力者：ヒルマン小林恭子，翟東娜）からの助成を受けている。

【謝辞】

本研究の調査に協力してくださった方々に，心より感謝の意を表します。

【参考文献】

和泉元千春・魚住悦子・熊野七絵・羽太園・三浦多佳史（2005）「まとまりのある話をするための教材の製作－『初級からの日本語スピーチ－国，文化，社会についてまとまった話をするために－』制作の実践から－」『国際交流基金　日本語教育紀要』第１号，pp.202-216

清ルミ（1990）「スピーチ・ディベート－上級レベルのビジネスマンのために」『日本語教育』71号，pp.147-157

土岐哲（2001）「日本語のスピーチ教育」『日本語学』20(6)，pp.6-10

林里香（2010）「留学生の口頭表現クラスにおける聞き手の役割」『授業実践開発研究』，千葉大学教育学部授業実践開発研究室，pp.53-61

平田未季・船橋瑞貴（2011）「聴衆を意識した口頭発表指導－「注釈挿入」を例として－」『2011年日本語教育学会秋季大会予稿集』，pp.202-207

平田オリザ（2010）「劇作家として自然な日本語とは何か」『ICJLE2010日本語教育世界大会予稿集』

ヒルマン小林恭子・深澤のぞみ（2009）「日本語のビジネススピーチの特徴と日本語教育への活用の可能性」，『JSAA-ICJLE2009日本語教育国際研究大会（オーストラリア　ニューサウスウェールズ大学）予稿集』，p.123

ヒルマン小林恭子・深澤のぞみ（2010）「パブリックスピーキングのジャンルとしての日本語式辞スピーチの特徴」，『ICJLE2010日本語教育世界大会（台湾　国立政治大学）予稿集』

深澤のぞみ・ヒルマン小林恭子（2011a）「日本語教科書における口頭発表指導について－日本語パブリックスピーキングの教授法確立を目指した基礎研究－」『金沢大学留学生センター紀要』第14号，pp.29-42

深澤のぞみ・ヒルマン小林恭子（2011b）「日本語ビジネス（式辞）スピーチの構造－日本語パブリックスピーキングの一ジャンルとして－」『2011年日本語教育学会春季大会予稿集』，pp.159-164

藤田朋世・フランプ順美（2009）「ピア・ラーニングの概念を取り入れたスピーチコンテストの試み－重慶大学での実践報告－」『世界の日本語教育』19，pp.199-213

【参考ウェブサイト】

JET プログラムオフィシャル HP

http://www.jetprogramme.org/j/introduction/index.html（2012年１月７日アクセス）

Basic Study to Investigate on the Need for Skills Training in Japanese Public Speaking

Nozomi Fukasawa and Kyoko Kobayashi Hillman

ABSTRACT

As Japan's labor market moves towards a higher, more professional level of globalization, there is a growing demand for non-native speakers of Japanese seeking employment opportunities to have strong public speaking skills. In the midst of this social situation, there is a lack of research on what kind of Japanese language skills former Japanese learners need after they leave the classroom and begin working in Japanese society, especially with regards to public speaking. Through this paper, we conducted a basic analysis to investigate the need for skills training in Japanese public speaking. Our findings are based on the results of interview surveys with Japanese language educators and Japanese language users who work in the private and public sectors. Regarding public speaking, we discovered that there are differences between what skills Japanese language educators and Japanese language users (non-native speakers of Japanese) consider essential for communicating in public situations. The interests of educators focused not only on speaking skills, but also on developing a wide variety of balanced language skills. We found that they use speech activities as a means of reinforcing students' motivation toward learning Japanese language. On the other hand, we found that non-native speakers of Japanese face situations requiring *aisatsu* speeches where they must use *keigo* in a formal setting. They often search for the appropriate way to give a speech and ask Japanese colleagues to help them. Therefore, we believe it is necessary to further conduct an in-depth investigation on the needs of non-native speakers of Japanese who use the language for work. Also, we intend to research speeches prepared for Japanese language speech contests widely utilized in Japanese language education.